今川範政と和歌――『正徹百首』の評詞を通して――

付 神宮文庫本『正徹百首』翻刻

伊藤伸江

一

今川範政は、至徳元年（一三八四）から永享五年（一四三三）を生きた駿河の守護である。彼は、冷泉派歌人として冷泉為尹を支え、八十代に陸続と冷泉派を擁護する歌論を生み出した今川了俊の兄にあたる範氏の孫であった。すなわち、了俊は大叔父にあたる。

範政の和歌関係の事跡に関して考えるにあたり、まずこの了俊とのつながりを見ておきたい。

今川了俊は、嘉暦元年（一三二六）に生まれ、応永二十一年（一四一四）頃まで生存していたと考えられている。彼は、幕府の命を受け、九州探題として九州の経営を二十年以上にわたり試みた後に、応永二年（一三九五）閏七月に京都に召喚され、その後探題を解任されて、駿河・遠江国の半国守護をつとめた。この時、もう一人の駿河半国守護は、範政の父泰範、遠江半国守護は今川仲秋（了俊弟）である。しかし了俊は、応永六年末に、鎌倉公方足利満兼、大内義弘と手を結んで、応永の乱を起こし、失敗して駿河・遠江両国の半国守護を失った。『吉田家日次記』は、遠江国は、了俊の残党が蜂起しているが、いったん今川泰範と、今川直忠（了俊弟氏兼子）とにそれぞれ半国守護が任され、直忠が辞退し、最終的には泰範が守護となったと伝聞している（『吉田家日次記』応永七年五月十八日条）[注1]。乱の後、応永七年十月には、了俊の上洛と足利義満への服従がなされ（同記十月五日条）、すぐに今川泰範が守護職を拝領して遠江国に下向した（同記十月十四日条）。応永八年四月には、泰範が遠江国原田荘細谷郷の下地を東寺雑掌に交付する書下が存しており[注2]、泰範が駿河・遠江両国守護を兼ねていき、その子孫が

守護職につく道筋がついたのである。しかし、了俊から見た泰範は、了俊の計らいで還俗し駿河国守護を得たにもかかわらず、遠江国の守護の職も狙い義満に讒言をなして了俊を追い落とした、呆れた親族であった。了俊は応永九年の著作『難太平記』で、このような不満を述べ、泰範を「不道不義の親類」とひどく非難している。[注3] 範政の父と、了俊の間には権力争いによる確執があったのであった。

政治的に無力となった了俊は、応永十年代に『二言抄』（応永十年）を皮切りに著作を多く著し、応永十九年（八十七歳）に至っても、『了俊日記』、『落書露顕』を著している。了俊は、これらの著作を、子息範忠・甥の直忠ら一族の者に与えており、また一方では、正徹ら冷泉派和歌を学ぶ歌人・幕府関係武家に与えていた。[注4] 了俊は、秘説であっても、「此道に心ざしある人々にはあながちに可秘事にはあらず」（『落書露顕』）[注5] と考えていたから、自らの周囲にいる和歌数寄の縁者・知人の求めに応じ与えていったのであろう。

一方、泰範の死後、範政が駿河守護となり、その駿河守護としての事跡は、現在のところ応永二十年（一四一三）から見られる[注6]（遠江守護は斯波氏が世襲している）。彼は、守護の任務、幕府の命による軍事活動などの合間に、応永二十年代から数多く物語、歌集、歌論書などの古典籍を書写した。[注7] 応永二十二年から三年にかけ『光源氏物語抄』、二十三年に『万葉集』（七月）、二十六年に『弘安八年四月歌合』（六月）、『小侍従集』（第三類本）（八月）、『和歌初心』（九月）、応永二十七年に『源氏物語系図』（二月）、『小侍従集』（第一類本）（三月）[注8]、『深秘九章』『阿古根浦口伝』（四月）という具合である。

こうした範政の書写活動は、応永二十年代にかかる最晩年まで執筆された了俊の著作にも及んでいく。実際、範政は、応永二十九年十月に『二言抄』を了俊自筆本から写しており、自筆本からの書写である故に、これを証本として備えることを考えている。[注9] 加えて、和歌・連歌に供するための数多くの歌語の注解から出来上がっている『言塵集』の東山御文庫本には、範政が相伝する流れの本があることが、相阿の奥書に述べられている。[注10] 同書版本にも、相伝を裏付ける歌語に対する範政の注がある。歌書以外にも、了俊筆『源氏物語』空蟬巻には、範政名の記された注があり、了俊の書を受け継いだことが証されていよう。範政は了俊関係の伝書を受け継ぎ伝える存在となりえている。

ただ、先に見たように、範政父泰範は、了俊からひどく恨まれていた。範政も、応永二十三年の禅秀の乱の際に出した書状で、薩埵山合戦に参加した曽祖父心省、祖父範氏には触れても了俊には触れない。[注11] だが、了俊とその子孫の心中に、泰範とその子孫に対する恨

みがあったとしても、範政側の立場は強く、了俊亡き後、一族内で、駿河守護を持つ範政が、了俊から書を与えられた者から、書を借りたり手に入れたりすることは可能であったと思われる。了俊の死後、やや時期が経ってから、了俊自筆本を範政が書写しているのもその証であろう。了俊の遺作・蔵書は、範政の手に、何らかの方法で渡っていったのであろう。

続いて、範政と同時期に、今川了俊の強い影響を受け、独自の成長を遂げていった歌人に正徹がいる。範政と正徹との関係はどうであったろうか。

正徹は、永徳三年（一三八一）に生まれ、長禄三年（一四五九）に七十九歳で生涯を閉じており、応永初年には十四歳、応永二十年には、三十三歳、永享元年には四十九歳である。範政より三歳年長で、ほぼ同年輩と言えよう。

正徹の和歌の学びは、応永二年頃の了俊との出逢いから始まっており、応永九年には、了俊や冷泉為尹・為邦らと東山の花見をし、応永十年には了俊と石山寺詣をするなど、親交を深め、歌書も相伝している。

そして、範政がまた、正徹と、歌の友として関わりを持っていたことは、正徹の招月庵を継承した正広が、文明五年（一四七三）に駿河に旅した際に回想している。[注12]

昔は今川上総介範政、老僧歌の友にて、朝夕ともなはれしかども、今は世の中移りて知（る）人もなし。（中略）さて、かの（臨川坊の）草庵に着きて、昔の物語などし侍るに、彼（の）範政の孫上総介義忠より、下（り）たるよし聞き給ひて、

萩が枝のもとの葉こそは散（り）ぬ共木末なりとて忘れざらめや

是は、かの範政・老僧・愚身など参会せし昔の事思し出（で）て、かく詠み給（ふ）にや。

正広は、応永三十一年、十三歳で正徹に弟子入りしているから、この回想は、正広の知る、それ以後の思い出ということになる。範政がいつから正徹と交際していたかは不明であるが、応永の終わり頃には、正徹と親しく和歌を詠む歌友であった。が、心敬の『ひとりごと』内で示された永享頃の和歌・連歌好士に、細川道賢、畠山賢良・持純らはいるが、範政は入らない。

『草根集』永享二年（一四三〇）八月十八日、1552歌～1559歌の詞書には、

十八日、碩蔵主とて、駿河の国よりのぼりたる僧あり、守護上総介範政ゆかりあり、その祈禱のためとて、住吉法楽百首すゝめられし中に

とあり、範政は永享二年八月には駿河にいた。さらに、正徹を知る

冷泉派歌僧の、永享三年九月から年末までの旅日記である『麓のちり』には、同年十月頃に駿河国府の自邸で歌僧と面会した今川範政が、「この二とせがほどれいならずわづらひて歌などにとりむかふべき心ちもし侍らずとていとさうざうしげにおもひ給へり」という様子であったと記述されている。[注13]

範政は、すでに永享元年（正長二年九月に永享に改元）から病を得て、和歌にもかつてほど熱心に取り組めず、駿河にいることが多かったのであろう。少なくとも永享二年八月頃や、永享三年秋から冬には駿河にいた。この後、永享四年の将軍義教の富士下向の接待を務めて五年に亡くなっている。都での範政と正徹との頻繁な和歌の交遊は、永享元年以前とおおまかに考えれば良いか。正広の「朝夕ともなはれし」という発言は、応永三十一年から正長元年頃の期間のイメージということになる。ただ、『草根集』巻一定数歌群を見ると、応永二十六年に、正徹は今川範政家にて一夜百首を詠んでいる。また応永二十七年には、聖廟法楽詠百首（以下通称に従い『正徹百首』と称する）を詠んでおり、こちらには、範政の評が書かれた独立伝本が存在する。これらから、両者の和歌における交際の開始時期は、少なくとも応永二十六年に遡らせることができる。

以上のように、範政は、冷泉派歌人了俊の歌論書類を受け継ぐことができており、正徹と親しく和歌を詠みあう立場にある人物であった。彼の和歌における動向の解明は、了俊と正徹の間をつなぐ重要なミッシングリンクをさらにあらわにする可能性も持つ。そこで、この論では、まず『正徹百首』を取り上げ、範政の現存する百首歌の和歌も援用しつつ、正徹歌に付随する範政評を見ることで、両者のこの時期の関係や歌の特質などを考えたい。

二

正広の編纂である正徹の家集『草根集』には、応永期の日次作品が入らない。これは永享四年（一四三二）四月二日、今熊野の草庵が焼亡し、彼が二十歳の頃より詠みためた詠草が失われた（草根集1734歌～1737歌の詞書）ことが主たる原因とされるが、『草根集』巻一之上には応永期の定数歌が残っている（便宜上順に番号を付す）。

①頓証寺法楽詠六十首和歌
②詠五十首和歌
③詠一夜百首
④聖廟法楽詠百首和歌（正徹百首）

『草根集』によれば、それぞれの詠出時期は、①応永二十一年四月十七日、②応永二十三年六月十九日、③応永二十六年十月、④応永二十七年二月十七日（独立した定数歌の伝本には正月とあり、本来

は正月十七日から二十三日に詠まれたもの（後述する稲田氏の推定に従う）となる。また、①は、崇徳院二百五十年遠忌に際して細川道歓家で行われた頓証寺法楽一日千首に出詠した歌群、②は冷泉為尹と、飛鳥井雅縁（宋雅）による点・評を持つ五十首歌、③は、今川範政の家での一夜百首、④は、北野天満宮への法楽百首（和歌のみ）であった。

稲田利徳氏には、巻一の定数歌群について論があり、[注14]さらに別途①④に関連して諸本と成立などを詳しく述べられている。[注15]④に関しては、草根集の百首に独立した百首の伝本も合わせて十六本の伝本を検討され、諸本の系統分類をなされた。稲田氏によれば、『草根集』とは別に百首歌として流布した伝本の、歌の本文に重点を置くことにより、伝本が、第一類本と第二類本に大別され、さらに評語の有無によりそれぞれ甲類・乙類に分けられる。そして、第一類本甲類は、正広が『草根集』を編纂するに際して依拠した伝本の面影を伝える諸本であり、第一類本乙類は、評語があるにもかかわらず、本文は本来評語の入らないはずの草根集本系統であり、そこから第二類本乙類から評詞を付加した混合本と考えられる。第二類本甲類は、中川文庫本の加証奥書「右者正徹以自筆本不違一字書写令校合早」から正徹自筆本系統と見え、しかし歌題が変更されていることから推敲段階をへて、正徹が後に書写した歌稿系列の本、第二類本乙類は、後にあげる神宮文庫本の本奥書等から、正徹が今川氏に書写し与えた伝本の面影を伝える本である。さらに、諸伝本の記述を総合的に勘案し、応永二十七年正月十七日から二十三日まで北野に参籠し、その間に詠じた百首であること、今川了俊、今川範永などと評詞作者に揺れがあるが、内容からも今川範政の評詞であることを改めて確認された。そして、正徹がこの百首を詠んでから程なく、範政は正徹に歌稿の拝覧を懇望し、評詞を加えて返却したと考えられている。

稲田氏の伝本調査による推定は妥当なものであり、従いたい。新たにこの百首を検討するにあたっては、稲田氏の分類の第二類本乙類を主軸に据えて見ていくのが至当であり、その中では、「右百首今川上総介範政可一見之由被申付而遣之処加言被返之候也」と正徹の立場で書かれた本奥書のある神宮文庫本が最善本と考えられ、今回は神宮文庫本を検討する。

なお、これまで、評詞を有する伝本では、はやく『続群書類従』巻第三百九十六本（稲田氏分類第一類本乙類）が活字本としてあり、第二類本乙類に属する伝本では、既に国枝利久氏が架蔵本を翻刻されているが、[注16]同本の奥書は「今川上総介範政可一見由（ママ）頼（稿者注）間遣処加言葉歌返之由清厳被申者也」とあり、「弟子あたりの書写していた系列にたつ一本かと予測され」（稲田氏）る。国枝氏本の

評詞は、神宮文庫本とかなり近いが、新たに神宮文庫本の翻刻を付すことで、わずかでも研究の進展に利することを意図する。

三

範政による『正徹百首』の評を概観すると、まず、百首全ての歌に評があり、その全体を通して、正徹詠を褒めちぎる傾向に気づく。中でも、「おもしろし」「殊勝なり」という語句が目立ち、「おもしろし」は二十九首の評に、「殊勝なり」は十九首の評に見られる。その他「めづらし」が七首、「金玉」が四首、「やさし」が二首、「すごし」が二首、「艶なり」が一首に使われている。他にも「一ふしあり」「一躰候」とか、「優美なり」「あらまほし」といった様々な称賛の語句を駆使しており、批判的な言辞と考えられるのは、19、21、30、34、60、62、78、82の八首の評にすぎない。

さらに、句評の中には、次のように、感動詞を交えて、相手の面前で口を極めて称賛しているかのような表現がある。合評会をし、語り合いの中で称賛を伝えているかのような口吻のものである。

春雨

10山のはの夕日の影はさやかにてかすめる庭に残る春雨

あらおもしろや、かかる事も残りて候ける。御浦山敷候。

郭公

24ほのかにぞ月は残れる郭公いま一声を面かげにして

あらあらすごの景気候哉、遊ばし出され候つらん。折節の御心の中、さこそ澄候つらん。御浦山敷候物哉。

路薄

41ひとりすむ草の庵の村薄誰わけ来てか心みだれん

あらすごのさま哉、面白候。

暮秋

55時しもあれ夜を長月の夢よりもうつつはかなく暮る秋哉

うつつはかなく、あら面白つづき候哉。

評詞は、百首のほとんどを良い歌と認めており、一部については手放しで称賛する立場にある。これは大きな特徴であり、『正徹百首』評詞は、歌道家の師匠に依頼して点をもらう場合に与えられるような評詞ではない。例えば、同じ『草根集』巻一之上に存する『詠五十首和歌』は、正徹が冷泉為尹と飛鳥井宋雅の点と評詞をもらっているが、私家集大成本では評詞は九箇所で、類似表現を持つ歌の指摘、歌語として不適格な語句の指摘といった批判が見え、短くより厳しいものであった。[注17] 範政は正徹の和歌の技量を自らより上であるとはっきり認め、それを前提として評しているのである。加えて、例に出した中で、10・24歌は、「うらやまし」という評も持

つ。ぼうっと霞んでいる夕暮れ時の庭に春雨の微かな雨脚を重ねた10歌では、今まで詠まれていない風情を発見したことを素直に羨み、24歌では「すごし」と評しうる風情を詠みうる、その澄みきった心情を羨む。相手の和歌に対する対し方や心持ちへの素直な羨望を見せるのは、詠歌に関する考えの基盤を同じくする気安さもあるだろう。

このような『正徹百首』の評詞の性質に着目する時、類似の性質を見せているように思われる百首歌の評詞としては、忍誓の『詠百首和歌（建保年中名所題順徳院御会）』（康正三年（一四五七）八月）の、正徹の評詞がある。正徹は、範政ほどの感嘆の姿勢は見せないものの百首の多くの歌に称賛の語句を評として付す。「めづらし」「あたらし」といった語句を多く使用している上、詞中で、東国にいて歌の名所を実地に見ている忍誓を羨み、忍誓からもらった名取川の埋もれ木の話に及ぶなど心の交流を示す記述もしている。[注18] 連歌師としても著名な忍誓は正徹の和歌の弟子であるが、[注19] 評詞の記述はかなり親しさを見せていた。どちらの百首にも正徹が関係しており、範政は正徹を学ぶ立場で、批評の仕方に関しても影響を受け、模倣する側であろう。それゆえ、正徹の、歌の弟子たちの和歌に対する批評の形式的なあり方は、個々の歌の美点を丁寧に記すことで全体として褒めながら、一部の和歌について詞を直していくといったものであったかと思われるのである。範政評に見られる口語表現は、歌会の席での合評をよしとした冷泉派らしい姿勢の一つの表れとも見えようか。[注20]

範政の歌評の中で、注目されるものとして68詠の評がある。

埋火

68とにかくにさえ明こそ埋火のかげ迄うすき衣なりけれ

是又殊勝。何とて毎首如此あそばし候やらん。後京極殿の御難も、かやうの事をこそ申候やらん、承し物を。ちと御ひかへ候べき、御ひかへ候べき。[注21]

そもそも、この正徹の「埋火」題の歌は、この題で普通使われる語句で詠まれていない。例えば、初句「とにかくに」は、「とにかくに身のうきことのしげければひとかたにやはそではぬれける」（続後撰集・雑中・八条院高倉・1179）のように、思い悩む心情を詠む際に使われる語句で「埋火」題に使っている歌は、正徹歌以外管見に入らない。「埋火」は「うづみびのあたりははるの心地してちりくるゆきを花とこそ見れ」（後拾遺集・冬・うづみびを読める・素意法師・402）のように、その暖かさと光を表現するはずの題である。「さえあかす」も、夜中にひどく冷えていく外の情景を表現する語句で、屋内の「埋火」には本来使われない。また「薄き衣」は基本的に夏衣の涼しさをよむものである。ところが、この歌は、埋

火の光も薄く消えかけた寒夜、纏った衣も薄く、寒さに震えている室内の様が描かれる。題を外れ、薄い衣を纏い凍りつくような寒さにさらされた我が身が詠まれている。さらに初句からは、心情面にも多くの悩み事を抱え、憂いにもさらされている印象が与えられる。正徹の心象風景がこうしたものであることが示されているのである。

これに対して範政は、歌に感嘆すると共に、埋火の光が薄くなりいずれ消えることに寄せて、御京極摂政良経の難の例を引く。[注22] 後京極摂政良経は、建永元年（一二〇六）三月に三十八歳の若さで急逝している。良経の急逝に関しては、例えば『十訓抄』[注23]に

近くは中御門摂政殿も、

朝眠遅覚不レ開レ窓

といふ詩を作り給ひて、いくほどなく御とのごもりながら、頓死せさせ給ひにけるとぞ。

と、漢詩句が死の予兆となったという逸話が見える。詠歌の言葉を慎むことを勧めるところから、歌言葉が、未来の予兆になるかの怖れを抱く、範政の歌に対する意識の方向が見えよう。

さらに、歌言葉の選択についてのまた別方向からの意見が、次の歌に見られる。

寒蘆

60難波江に生るのみかはをしなべて豊あし原は冬枯にけり

此御詠一首のしたては、御骨をおられ候歟。但をしなべて豊葦原のかるるとにては、若今ほどの人の耳にや、たち候はんずらん。疵をもとむる世中に候へば、遊ばしかへられ候へかし、如何候。

千鳥

62なににかは身をなぐさまん和哥の浦の友なし千鳥音をたてずして

あらあら御理候哉、尤同心銘肝難堪候、不便候。此一首、作者両人書とや、又身をなぐさまんは、自然躰にて候。なぐさめんとにてはいかが候べきや。よくよく御案じにて御定候へ。

60詠は難波江の蘆を詠みつつも、「豊葦原」中が冬枯の様子であると表現する歌で、本来祝意を込めて表現される言葉である「豊葦原」が、「冬枯」と詠まれるのは、他に例を見ない。範政は、「豊葦原」を詠み入れた正徹の工夫を褒めながらも、「疵を求むる世中」ゆえ、表現を変えたらどうかと示唆している。

この「疵をもとむる世中」という表現は、元来『源氏物語』紅葉賀巻にある。藤壺が、光源氏との密通の末に産んだ皇子が、不義の子とばれはしないかと思い悩む際に、「さらぬはかなきことをだ

に、疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか」とあり、「疵を求むる世」は河内本では「疵を求むる世中」である。[注24] あら探しをする世間の様子ゆえに、どんな悪い評判が立つかと心配する発言で使われており、『光源氏物語抄』『河海抄』など当該箇所に注はないが、『源氏物語提要』では「女御も何ともして名のたゝぬやうにと思ひみたれ給ひける」とまとめられ、範政が正徹について懸念した点もわかろう。不用意な和歌表現によって、正徹が政権を批判したとする評判が立ち、正徹に何らかの不利益が出る事を怖れ、表現を変えて身を守る必要性を進言しているのである。

62詠では、正徹は、「和歌浦の友無し千鳥」と、自らの歌人としての境遇を例える。正徹自身が歌壇で孤立無縁であり活躍できず鬱屈している様であるが、範政は、正徹に、激しく同意、同情を示す。評の「此一首作者両人書とや」は、伝本類に表現の乱れが見られ文意が取れないが、国枝本では「此一首作者両人書候はゝや」とあり、作者として二人、すなわち自分も加えて書きたいの意であろう。範政は、正徹が和歌に込めた心情に、冷泉派歌人としていわば共闘する意識を持ち、正徹を肯定し親しく支えていたのである。

これらの詠、特に62、68詠には、正徹の暗い心象が見える。対して、範政注は、歌言葉が実人生に影響を与える可能性を考え、自らも含めた様々な立ち位置の他者の受け止め方について書いている。

正徹に関して、応永二十七年頃の和歌の事跡は乏しく、応永二十八年は『慕風愚吟集』が残っているが、正徹関係では東益之邸での詠歌や、堯孝勧進の玉津島社法楽百首への出詠がわかる程度である。それゆえ、この百首での、述懐性の強い正徹の和歌は、まず正徹のこの時期の和歌の一傾向を示すものとして注目すべきである。出詠する歌会の場などで、彼の感じた心情をうかがわせる証左となるものであろう。

正徹の師たる冷泉家を見ると、すでに応永二十四年に、冷泉為尹が死去しており、その後、為之が継ぎ（上冷泉家）、近江国小野庄の領家職を所有する。だが、為尹は、冷泉家領荘園のうち播磨国細川庄に関しては、応永二十三年（一四一六）頃に、領家職・地頭職を持為（持和）に譲り、為之には三十石の得分のみを譲っており、[注25] ここに持為の下冷泉家がおこった。だが、若年の当主であり、応永二十六年三月の禁裏御会では為之が出題したが、後に応永二十九年の足利義持開催による名号和歌では、耕雲が合点する。応永二十八年一月の義持の参内時には飛鳥井雅縁が伺候（『慕風愚吟集』）、青蓮院門跡にて行われる将軍の歌会始では、少なくとも応永二十九年から飛鳥井雅縁が継続して出題する（『満済准后日記』）。既に、応永二十五年の義持の伊勢参宮では『耕雲紀行』が執筆され、応永三十一年の伊勢参宮では、飛鳥井雅縁と推定される[注26]人物によって『室

町殿伊勢参宮日記』が執筆される。為尹なき後、将軍義持は、和歌に関して耕雲や飛鳥井家をまず用いていると見られ、両冷泉家は飛鳥井家や耕雲の存在に押されている。さらに、応永三十一年には、持為が細川庄を没収された不祥事[注27]も重なった（『兼宣公記』応永三十一年二月十五日条）。将軍が足利義教になると、多くの廷臣らが忌避され、「抑左相府殿政務之後、遭事之輩」が記された『薩戒記』永享六年六月十二日条[注28]には、「左少将持和朝臣被止出仕」と見える。『新続古今集』の撰者も飛鳥井雅世が任命され、永享八年二月には、上冷泉家の小野庄も義教によって没収されてしまったのであった。為尹なき後の冷泉家の衰えは、持続的に進行していく傾向にあり、正徹の詠歌環境も暗いものになっていったであろう。その状況に対する心情表現の一つの現れとして、『正徹百首』の述懐詠をとらえておきたい。

ただ、正徹も『草根集』巻一之上、『詠五十首和歌』で、冷泉為尹のみならず飛鳥井雅縁（宋雅）の点と評詞を乞い、為尹在世中に既に飛鳥井家とも関わっている。将軍家と良好な飛鳥井家の政治的な立場を思えば、冷泉家が力を失っていくにつれ、範政のような武家歌人ならばさらに、冷泉家のみならず飛鳥井家とも関わる機会が増えまた必要となるであろう。例えば、永享十一年完成の『新続古今集』に、既に故人となっていた範政は、恋一と雑中に各一首、計二首入集であったが、雑の入集歌は次のような歌である。[注29]

駿河国に侍ける比（ころ）、歌を番（つがへ）て権中納言雅縁もとにつかはして判詞しるしつくべきよし申けるを、書きてつかはすとて、よしあしを和歌の浦波たどるまに風のつてさへ遠ざかりつゝ、と申たりける返ごとに

源範政朝臣

1910 よしあしを君しわかずはかきたむる言（こと）の葉草のかひやなからん

歌の詞書で、範政が和歌の指導を願った飛鳥井雅縁は、『新続古今集』の撰者雅世の父であり、延文三年（一三五八）に生まれ、正長元年（一四二八）十月、つまり応永末年（応永三十五年）が終わり半年ほどで死んでいるから、範政が指導をしてもらった時期は特定できないものの、ほぼ応永年間のうちであった。範政の歌は、撰者雅世によって、永享から振り返って応永の頃に、いかに父宋雅が和歌師匠として影響力を持っていたかを示す、格好の宣伝材料とされてしまっており、そうした飛鳥井家側に立った理解の偏向は意識せねばならない。ただ、『正徹百首』の評詞をあわせみる時、範政は、応永二十七年の時点では、はっきりと、冷泉派歌人として活動しようとしており、その後の『麓のちり』の冷泉派歌僧に対する歓迎ぶりなどからも、その姿勢はずっと堅持している。そうした姿勢

を持っていても、また一方で飛鳥井家側にも指導を頼む必要があった範政のあり方は、幕府に従属する武家としての立場に引きずられる様を見せており、正徹60詠に対する、舌禍事件となることを強く心配する態度が理解できよう。

四

『正徹百首』の評詞は、範政と正徹の歌人としての立ち位置から、正徹歌への評価は既に定まっていた。それゆえ、評詞からはむしろ、両者の人間関係や、範政が和歌をどのようなものと考えていたかを示すような表現を拾うことができた。『正徹百首』で、歌友としての立場から、感情の吐露を戒める範政の評詞は、この時期の範政と正徹の親密な関わりの具体例である。

それでは、範政自身、和歌をどう詠んでいたのであろうか。彼のまとまった詠草としては、二種類の百首歌が現存し、その他には、永享四年の足利義教の富士御覧の際の歌会詠が紀行文の中に残され、『新続古今集』に二首、『兼載雑談』に富士詠が一首引用され論評される程度で、多くはない。

百首歌二種は、いずれも某年夏に、駿河の浅間神社に奉納したものであり、両百首を収める古典文庫の表記に従い、「暁立春」題から始まる百首を範政百首（その一）、「立春」題で始まる百首を範政百首（その二）と称するが、両百首には、範政が「従四位下上総介源朝臣範政」と署名している。[注30]『深秘九章』奥書（彰考館本）によれば、範政は応永二十七年四月には正五位下であり、そこからこれら百首歌は、応永二十七年四月以降で、かつ従四位下に昇進して以後に詠まれていることになるから、[注31]ほぼ正徹百首に評詞を書き込んだ時よりも後の詠としてよいだろう。

二つの百首歌のうち、その一の百首歌の詠出時期に関しては64番詠を推定の一つの手がかりにすることができる。

礒千鳥

64こゆるぎの礒路に今はよる波の立ゐに馴るゝ友千鳥哉

この歌は、「こゆるぎの礒」を詠むが、その際にあえて「礒路」と「五十路」を掛けて詠んでおり、かつその「五十路」に「今はよる波」と続けている。

こうした掛け方をする歌例として、『明日香井和歌集』建保三年（一二一五）六月二日、仙洞歌合での「松経年」詠と、『延文百首』の源有光の「歳暮」詠を上げておく。

1194いつまでかまつのしづえにこゆるぎのいそぢにかかるなみもうらめし　（明日香井集）

2470いとはやもながるるとしはこゆるぎの五十にかかるおいのな

みかな　　（延文百首）

『明日香井和歌集』の作者飛鳥井雅経は、この年四十六歳になっており、五十代が視野に入ってきている。源有光は、『延文百首』詠進時（延文元年（一三五六））には四十七歳であった。このように、四十代後半から、「五十路にかかる」と詠み出す。範政のように「磯路（五十路）に今はよる」と「よる」を使う歌例は、『建保名所百首』、「吹飯浦」を詠む僧正行意歌がある。

1058あら玉の年さへ老の波による五十ふけひのうらみをぞする

『建保名所百首』の詠出時期（建保三年（一二一五））には、行意は四十五歳であった。これらを勘案すれば、「よる」を使用する範政百首（その一）は、四十代後半以降、四十五歳あたりに詠出されたと考えて良いだろう。四十五歳の年ならば、応永三十五年で、四月に正長元年と改元されている。四十六歳の翌正長二年九月には、永享元年と改元された。この両年は、すでに従四位下に昇進している（静嘉堂本『千載集』奥書の範政署名による）ことが明らかな、応永三十四年三月以降であり、永享三年、『麓のちり』で、ここ一、二年病気で和歌に打ち込めないと嘆いていることとも矛盾しない。ここでは仮に正長元年夏の詠と考えておく。

また、64番詠には、波の寄せては返す様を表現する「波の立ゐ」という言葉があり、例えば『千五百番歌合』、冬二、九百六十三番の丹後の歌では、「1871よやさむきともなしちどりうちわびてなみのたちゐにねをのみぞなく」と詠まれている。さらに「立ゐに馴るゝ」となると、『延文百首』、「山家」詠に、雲や霧が垂れ込めたり晴れたりする山の天候に慣れたと詠む入道大納言公蔭女の歌「395雲霧のたちゐになるるそれならでともはあらしの山ふかき宿」があり、範政歌は、寄せる波が大きく立ったり小さく立ったりするように様々な出来事が起こる、平穏ではない我が身の時の流れが実感されており、その運命にいつしか慣れた自分と、気持ちを同じくする仲間の「友千鳥」の姿が詠まれているといえよう。

さらにこの百首の中では、次のような歌が目をひく。

（範政百首その一）

寄木雑

96をかしなきつみさへおふのうらなしにかたへの人の口のはぞうき

（その一）の96番歌は、「犯しなき罪さへ負ふ」と、身に覚えのない罪を得ることを示し、「人の口の端ぞ憂き」と周辺の人々の口に上る噂を憂えている。伊勢国の歌枕「麻生」を「（罪を）負ふ」と掛けるのは、この歌以外に管見に入らない。この他、91番歌にも「春のよそなる身」と沈淪の表現がある。

また、もう一つの百首には、次のような歌が見られる。

（範政百首その二）

田家鳥

90風陰の門田にあさる鶴だにも毛を吹世をばさぞ厭らし

祝言

100かだましき人をば人と我が君のことわかちする世ともならな

む

90番歌では、風のこない門田にいる鶴の姿を詠むことで、故なき非難を避けようと苦心している我が身を暗示し、吹毛の難をなす世[注32]の中を批判している。「毛をふく世」という表現には為家の歌「かち人の野分にあへるふるみのの毛をふくよこそくるしかりけれ」（新撰和歌六帖・みの・1852、続千載・754、夫木抄15174（ふるみの））があるが、範政歌は「鶴だにも」と吹毛の難を厭わしく思っている自らの境遇を類推させる点、一段と題の本意を逸脱し、述懐に傾いている。

また、100番歌でも、「祝言」題であるのに、心のねじ曲がっている人間とそうでない人間の判別がなされることを願う気持ちを述べ、今の世が祝われるべき治世でないことを匂わせてしまう形になっている。

いずれの百首歌でも、範政は、いつ罪を得るかわからない、油断のならない世に緊張し生きる身のつらさと、そのような政治への不満、よりよい世の希求といった、自らの状況、境遇への思いを率直に歌に入れる。このような詠み方をする歌人であるからこそ、応永二十七年の正徹百首への評詞も、範政の立場から感じた、当時の正徹を取り巻く環境を示唆するものと思われよう。

五

範政は、大変な熱意と根気を持って多くの古典籍を書写したことでも知られており、その際には、常に校合を試み、厳格に自らの納得のいく作品の姿を再生しようとしてきている。それゆえ、校合した作品は、学習され、和歌における範政の表現の血肉となった。[注33]これは了俊の歌書の継承に関しても言えることであろうが、そうした点にはまだ十分触れる用意がない。

本稿では、まず了俊の歌書を継承する位置にあった範政が、冷泉派歌人として和歌と対峙する時、いかなる評詞をなし、また歌を詠むかを、範政の『正徹百首』の評詞の言説や、浅間宮への法楽百首歌から見てきた。歌人としての力量の差を心得ており、賞讃に終始しつつも、正徹の述懐色の強い和歌表現に、共感と他者からの反応への不安を記す範政の評詞からは、応永二十七年頃の冷泉派歌人を取り巻く歌壇環境の厳しさを感得できる。範政の『正徹百首』の評

詞は、正徹周辺の文化的環境をも読み取りうるものであるといえよう。また、範政は、法楽百首歌に、政治への恐れと不満を、自由な表現を用いて詠み入れており、室町将軍との関係性が強く影響する彼の詠歌の有り方も意識されよう。

注

和歌の引用は、神宮文庫本『正徹百首』は、本稿付載の翻刻により、その他は断らない限り日本文学Web図書館内の『新編国歌大観』による。ただし、『草根集』は『新編私家集大成』による。また『正徹百首』の和歌と評詞の引用に際しては、読みやすさを勘案して、適宜濁点、句読点を付し、踊り字はひらいている。

（1）『吉田家日次記』は、堀川康史「京都召還後の今川了俊」（『日本歴史』八三六号・二〇一八・一）引用の天理図書館本を参照した。

（2）『静岡県史　資料編6』（平成四・静岡県）所収応永八年四月二十日「遠江守護今川泰範書下」史料番号（一二九〇）

（3）『難太平記』の引用は『群書類従』第三百九十八による。また長谷川端他「『難太平記』下巻」（『中京大学文学部紀要』四二－二、二〇〇八）（貞享版本と他三本の校異）を参照。

（4）了俊の著作のうち、『了俊一子伝』は、一子彦五郎（範忠）へ、『言塵集』は、讃岐入道法世（今川直忠）に与えられている（松平文庫本奥書）ことがそれぞれ了俊の奥書からわかる。また、正徹が了俊から各種歌学書を与えられていることは有名であり、『言塵集』松平文庫本巻一奥書にある、相伝した尊命丸とは正徹であることが、稲田利徳氏により解明されている。また、『言塵集』が和歌好きで有名であった細川道歓（満元）のような幕府関係武家の手に渡っていることは、注（10）『言塵集』東山御文庫本参照。了俊の歌書の伝来に関しては、荒木尚『今川了俊の研究』（昭和五二・笠間書院）に詳しい。

（5）『落書露顕』の引用は『歌論歌学集成第十一巻』（平成十三・三弥井書店）による。

（6）『静岡県史　資料編6』（平成四・静岡県）所収応永二十年十一月十二日「駿河守護今川範政書下」史料番号（一五一〇）

（7）米原正義『戦国武士と文芸の研究』（昭和五一・桜楓社）、井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町前期　改訂新版』（一九八四・風間書房）などに示されている。

（8）『小侍従集』の書写と校合に関して触れた論に、家永香織「『小侍従集』伝本考」（『和歌文学研究』第一二〇号・二〇二〇・六）がある。

（9）『二言抄』（内閣文庫本202・40）には、次のような範政の書写奥書がある。

右此一帖、彼以自筆本令書写。可備証本哉。

応永廿九年壬寅十月日　前上総介範政在判

（10）『言塵集』東山御文庫本の相阿奥書に、「其次細川前管領右京兆道歓伝之、又今河前総州範政此本相伝於其外者嘗以不被洩於秘抄也、……」と見える。荒木尚『今川了俊の研究』（昭和五二・笠間書院）を参照。

（11）上杉禅秀の乱の際の範政の書状の検討などから、今川範政から見た了俊を考察した口頭発表に、呉座勇一「応永・永享期における今川氏の歴史認識」（日文研共同研究「応永・永享期文化論」二〇一八・一二・一五）がある。

（12）本文の引用は稲田利徳『正広日記注釈下』（『岡山大学教育学部研究集録』第一二〇号・二〇〇二）の、松平文庫本の校訂本文による。

（13）奥田勲・片岡伸江「山岸文庫蔵『なくさみ草　麓のちり』解題・翻刻」（実践女子大学文芸資料研究所年報11・一九九二）参照。引用は濁点を付し、踊り字はひらいた。

（14）稲田利徳『正徹の研究』（昭和五三・笠間書院）第二篇第二章第二節

（15）注（14）書第三篇第二章第一節、同第二篇第二章第三節

（16）国枝利久「架蔵本「正徹百首（聖廟法楽詠百首和歌）」：解題と翻刻」（『親和国文』二号・一九六九・一二）

（17）『詠五十首和歌』の九首の「評語」に関して、稲田利徳氏は、注（14）論文で「一箇所を覗き、他は為尹のもの」、「宋雅のは、「飛鳥井云」の注記のある「旅春雨」の評語だけであろう」とされる。

（18）古典文庫『中世百首歌四』（昭和六〇）所収「詠百首和歌（釈忍誓）」参照。

（19）草根集康正元年閏四月三日の8897・8898番の贈答の詞書に「閏四月三日、忍誓法師田舎下向とてきたりて、師弟の事に状を所望ありしに」とあり、忍誓は、弟子であり、正徹に和歌の関係で紹介・推薦を依頼していると考えられる。なお『私家集大成』翻刻は名を「忍担」とするが、「忍誓」の誤り（書陵部蔵御所本（510・28）の画像（国文学研究資料館）にて確認）。

（20）『了俊一子伝』（『日本歌学大系5』）に、「一、我よめる歌を人に見せ可」合事。歌も連歌も、我作をよしあしを分明に覚る事は古の上手達も大事と云り。我よりもおとりたると思人も、人の歌連歌の善悪をばよく知といへり。まして堪能上手には殊更みせ合てなほさする、古実といへり。此事師説也。又人

の歌を我にみせ合をば、相構、心を隔てず、我見及心に存筋を可レ云也。あしきを面にまげ、よしと云、善をわろしと云べからず。数寄は自他不レ可レ有二外心一事云々。同類歌等を人の意得させられたるは有難き志也」とある。

(21) 注(16)にあげた国枝氏本では、歌注「是又殊勝なにとて毎首如此あそはし候やらん後京極殿の御難もかやうの事をこそ申候とやらん承候し物をちと御ひかへ候へかし」である。

(22) 正徹は、応永十六年に冷泉為尹本『秋篠月清集』を写しており、それを応永二十七年十二月に再度書写し、某に餞別として送っている（井上注(7)書、稲田注(14)書に言及がある）。この年正徹周辺で良経の話題があらためて語られ範政の耳に入っていた故の話題という可能性も考えられよう。

(23) 『十訓抄』の引用は、新編日本古典文学全集本による。

(24) 源氏物語の引用は、日本古典文学全集本、校異は『源氏物語大成』と加藤洋介『河内本源氏物語校異集成』（二〇〇一・風間書房）を参照した。

(25) 冷泉家時雨亭叢書『冷泉家古文書』（一九九三・朝日新聞社）内第31号「冷泉為尹譲状」（応永廿三年十月十六日付）

(26) 稲田利徳「『室町殿伊勢参宮記』の作者の特定」（『中世文学研究』24・一九九八・八）により、推定されている。

(27) 小川剛生『中世和歌史の研究』（二〇一七・塙書房）第二部第五章に論がある。

(28) 『薩戒記』の引用は、『大日本古記録 薩戒記五』（二〇一二・岩波書店）による。

(29) 『新続古今集』の引用は、『和歌文学大系12 新続古今和歌集』（平成一三・明治書院）による。

(30) 天理図書館蔵『浅間宮和歌』（911.25－イ17）を閲覧確認し、引用は古典文庫『中世百首歌四』（昭和六〇）より、読みやすさを勘案して濁点を付した。

(31) 古典文庫『中世百首歌四』（昭和六〇）井上宗雄氏解説に、範政の位階表記（従四位下）から、従四位下に昇ったのを応永二十七年（一四二〇）四月から三十四年三月の間と見て、昇任以降の奉納と考えられるとの指摘がある。

(32) 例えば、『看聞日記』（続群書類従補遺二）応永三十一年六月五日条に室町殿（足利義持）の行為に関し、「吹毛疵」との批判の語句が見える。

(33) 例えば、範政は、応永二十六年の八月に、『小侍従集』を一夜で書写し、応永二十七年三月には、前年に写した『小侍従集』を校合し、落歌を書き入れ、校本となしている。その一の百首歌41番歌には、『小侍従集』以外には管見に入らない語句

「杣木たつ」がよみこまれており、こうした学習の成果ではないかと思われる。

本稿は、国際日本文化研究センターによる応永・永享期文化論研究会の共同研究会（二〇二〇年十二月十三日）で発表した内容の一部をあらためて、文章化したものである。発表時にご意見を賜った先生方にお礼を申し上げる。また、翻刻をお許し下さった神宮文庫にお礼を申し上げる。

神宮文庫本『正徹百首』翻刻

神宮文庫蔵『清岩之和歌百首』（図書番号・第三門一二五〇号、一冊）の翻刻である。この本は、縦21・7㎝×横13・8㎝の写本、外題「清岩之和歌百首　全」。綴葉装、料紙は斐紙、遊紙一枚、墨付十九丁、一面九行書。末尾に、論中で示したように「右百首今川上総介範政可一見之由被申付而遣之處加言被返之候也」の本奥書と、元禄二年（一六八九）十二月上旬の書写であることを示す書写奥書がある。裏表紙に朱の奉納印があり、天明四年（一七八四）八月に京都勤思堂村井古巌敬義が林崎文庫に奉納したものである。

凡例

一、でき得る限り底本の姿をそのままに翻刻するように努めたが、題は三字下げ、評詞は二字下げに統一した。漢字・仮名の別、踊り字、仮名遣い、用字も底本のままに翻刻したが、書き分けの多かった「雁」は「鳫」「鴈」を「雁」に、また「變」は「恋」に統一した。

一、それぞれの和歌に歌番号を付した。

一、明らかに疑義のある語句には稿者から（ママ）を付した。

詠百首和歌　私曰謂之清岩ノ百首和哥也　　釋正徹

立春

1雪のうちに出る日影のさしながらけふを春とやのとけからましたけすかた誠に相應し殊勝に候

山霞

2かすめともありとしられて高砂のおのへの松に春風そ吹ありとしられて殊金言候哉

海霞

3そことなき霞は晴てわたつ海に残るも曇る八重の塩風

そことなき霞の猶残るも曇ると侍る姿艶に候哉

子日

4引うふる子日の小松いく千代のかけを二葉にやとし初らん

二葉の松にいく千世の影をやとされ候したて殊勝に候

若菜

5袖さむみかたみの若菜沢水につむもたまらぬ淡雪そふる

さる躰にて候哉面白候

朝鶯

6朝戸あけはおとろきぬへし呉竹のちかきさえたに来ぬる鶯

朝閨閑座誠に鶯を賞せられ候

軒梅

7うつりきて軒はの花と成にけり嵐にふかき四方の梅かゝ

始中終其語不可説候

夜梅

8春の夜の枕の梅のうつり香に敷かたをしきうたゝねの夢

おもしろく候物哉殊勝

岸柳

9川岸やなかるゝ水のあは糸をよるにやあらぬ春の青柳

よくつゝき迄いたはられ候やさしくきこえて候

春雨

10山のはの夕日の影はさやかにてかすめる庭に残る春雨

あらおもしろやかゝる事も残りて候ける御浦山敷候

春月

11夜もすから嵐に晴ぬひかり哉月やかすみをいとはさるらん

ねもわたりかゝり又一躰に聞て殊勝に候

春曙

12さためすよ秋の夕のことはりも又あけほのゝ春の哀に

此一首誠に源氏めかしくおもしろくて候

帰雁

13いそくらん心もさそなあれわたる春の田面の雁のとこ世を

なひやかしく聞え候

栽花

14うつしうへははや木たかゝれ山桜白雲まよふ花と見る迄

一躰にて候

翫花

15この春はかさしてもみん桜花けにや四十年の老やかくれん

作者の御心根聞え候殊勝に候

落花

16いかにしてまかせさらなん散やすき花をうき世の風の心に

あら〳〵面白候誰もさこそ思ひ候へともかやうにはつゝけられす候物を

春草

17すさむらん御牧の草の古葉さへ又こまかへる春と見えつゝ

かやうの御詠のましはりこそ猶たのもしく殊勝に候

款冬

18露かけて結ふやいかに款冬の花はひもとく井手の下帯

一ふしに聞え候

紫藤

19咲藤の花のかつらかさほ姫の袖のみとりの松にかゝれる

此御詠そ五文字御哥には不足に聞え候御案してかへられ候へかし如何候

暮春

20いつかたも向後知られぬ花鳥の跡をや春の猶したふらん

おもしろく候〳〵

首夏

21けふも又青葉の桜雪とふる山路わけてや夏の来ぬらん

第四の句少し聞にくゝ候山路を分て夏や来ぬらんと候

歟山を越てやと歟なとにては如何候へきやわけてやと

すゑられ候へは何とやらん耳にたち候如何候

更衣

22たちかふるならひもしらぬ墨染の衣はいつのかたみ成らん

作者の御身に取りてなを殊勝に候

卯花

23残（ママ）りあふ木の下とをき夕闇に道は迷はす咲る卯花

とりなしおもしろく聞え候

郭公

24ほのかにそ月は残れる郭公いま一声を面かけにして

あら〳〵すこの景気候哉遊はし出され候つらん

折節の御心の中さこそ澄候つらん御浦山敷候物哉

盧橘

25立花の咲る軒はの苔衣ふるきいたまに袖のかそする

板間の袖の香めつらしく候

早苗

26もるまてもくるしからしと賤男やわか家の門に早苗とるらん

一ふし面白く古集の風躰眼前の間に候

菖蒲

27なかきねのあやめの草の代々かけて誰九重に引はしめけん

古躰作例定以相應殊勝に候

梅雨

28山のはも又川浪とわきて見すみな雲水の五月雨の比
始中終殊勝に候又題の字当社法楽の心ね誠感存候
夕立
29吹とつる空にもあらす風こえて白雨晴るゝ雲の通路
彼乙女のすかたにも猶たちまさり候雲のかよひちにて候
夏草
30ことしけきことの葉なから夏草の花もましらぬ道そ物うき
御述懐はさる事にて候へとも悉金玉にて候物を御為は
御法楽にはいかゝとそんし候
夏月
31やとるさへあかてそ明す白妙のわか衣手のみしかよの月
おもしろく候あらまほしく候姿にて候
瞿麦
32玉とのみ花にわきてや結ふらし籬も草のなてしこの露
籬も草のなてしこのつゝけやう殊やさしく珍敷候
氷室
33都まて涼しかれとやかよふらん氷室を送るうたの山かせ
おもひより候はす候風情にて候めつらしく殊勝に候
納涼
34日数さへつもる岩ゐに澄水のそこの心もしらぬ夏かな
第五句ちと何とやらん耳に立候いかゝ御案してかへ
こと葉候はゝ御かへ候へかし
夏祓
35水上やいく里人の御祓川瀬をせく迄のあさのゆふして
瀬をせく迄のなと詞つかひよに優美に聞え候
早秋
36わきてけふ身にしみまさるをともなしいつもうき世の秋の初風
下句秀逸のきはまりにこそ深心肝に候
七夕
37さよ衣ふたつの星の天つひれふるき秋にやかさね
そめけん
天つひれふるきなとつゝき誠にふるき躰もかよひ又
心はひたあたらしく候あらまほしく候躰に候
稲妻
38山もとの田面遥に風さはき村雲まよふ秋のいなつま
みるやうの躰あら〳〵面白哉
籬萩(ママ)
39したおきの露もあらしとしほる也秋にやあるゝ籬ならまし
秋にやあるゝ一句殊勝に候
野萩

40花も葉もうつろひそめて朝夕の露のみ寒きをのゝ
萩原
朝露の光花も葉もともにもえて面白候
路薄
41ひとりすむ草の庵の村薄誰わけ来てか心みたれん
あらすこのさま哉面白候
暁露
42ちきり来てその暁の露の身をてらさん月もめくりあへとは
釈教の心此暁露により来て花實
共以相備候
隣槿
43中垣のかけものこらすしほるゝや朝日すゑこす朝かほの花
影ものこらすしほれぬる槿に一栄一落の
観心を催され隣をへたゝ(ママ)て中垣も今は
中道実相の妙理に叶候歟と凡慮にも
押はかられ候此百首の中には申請て
主になり候はゝや
蔦風
44時雨ても友にみたるゝ露はなし松よりおつるつたの紅風
是又始中終おもふさまによくいひ立られ候しかも又勝(ママ)に候
夕鹿
45鹿はたゝうきを心にしらす共なくねにたえぬ暮と
思はん
此一首何となく安ゝといひ出され候さなから
心こと葉ねこもり五文字なと源氏夕霧のやらんと
侍ることはこと〳〵しく其便よろしくこそ
初雁
46露はらふ朝けの床に風たちて衣手寒し初雁のこゑ
あさ〳〵とかろく云立られたり誠に作者のしはさと
見えておもしろく候
叢虫
47草の原すゑ葉の紅の霜をいたみかるゝと見れは虫の
音もなし
かるゝと見れはと侍て虫のねもなしと侍る
首尾相應金玉驚耳目候
崎霧
48秋のうらの浪のみとりも薄きこきゑしまか崎の松の村霧
波のみとり珍しく候うすくこき絵嶋難及凡慮候
嶺月
49こえかゝる夕の雲や埋むらん月に峯なきをちかたの山
風情あたらしく候
湖月

50にほの海やもちしほしらぬ浪の上に今宵みちたる月の影哉
所から十五塩しらぬの御ことはおもしろく候
関月
51逢坂の山路の月は残るともいさしら川の関の明ほの
いさ白川とひきちかへられ候珍敷候あふ坂にて候
濱菊
52春秋の千代を友とや契るらんちらぬ花開く菊の濱松
一すかたに候
擣衣
53なへてよも麻にはあらし都人うつはいかなる衣なるらん
一首のしたて五文字の心をのへられてめつらしく候
黄葉
54風吹はもろきはゝその秋の色を染るもあさきえにや
時雨し
題の心よくまはされ候物哉
暮秋
55時しもあれ夜を長月の夢よりもうつゝはかなく暮る
秋哉
うつゝはかなくあら面白つゝき候哉
初冬
56わきて猶いつも八重垣けふしこそ神にしたかふ冬も来
おもしろきさまにて候
時雨
57ふりまさる袖の泪や槙の屋にやすくは過ぬ時雨なるらん
真木の屋にやすくは過ぬ時雨の本哥面白めされ。候物哉
あらふしきや
落葉
58秋をへし木の葉は霜に朽はてゝ散も色なき神無月哉
おもしろく候
枯野
59冬かれは又氷をそ埋むらん草に隠れし野への澤水
誠にこゝろふかき沢水に候哉
寒蘆
60難波江に生るのみかはをしなへて豊あし原は冬枯にけり
此御詠一首のしたては御骨をおられ候歟但をしなへて
豊葦原のかるゝとにては若今ほとの人の耳にやたち
候はんすらん疵をもとむる世中に候へは遊はしかへられ候へ
かし如何候
井氷
61山のゐの水の氷や結ふ手の雫にくもるかゝみなるらん
彼山の井よりは猶心ふかく聞え候

千鳥

62なに丶かは身をなくさまん和哥の浦の友なし千鳥音をたてすして

あら〳〵御理候哉尤同心銘肝難堪候

不便候此一首作者両人書とや又身をなくさまんは

自然躰にて候なくさめんとにてはいか丶候へきやよく〳〵御案しにて御定候へ

残雁

63はつ雪もふるやあられの玉つさにつはさをおもみ雁わたるらん

たけすかた共になりあひ候

網代

64ありふるもよそにやはみし網代木によるひを虫のあたの哀(ママ)を

蜻の命はたれもさこそにて候感涙餘袖候

寒月

65影さゆる月の桂の木からしや炑にもまさる色をしくらん

五文字なから殊勝に候猶第五句猶ぬけ候

庭雪

66雪のうちにあれのみまさる故郷はこのかし(ママ)三の道たにもなし

三径三道ともにもへて何はにても候へよくより来候誰か

加様にはよみ候へき

炭竈

67すみかまの雪や氷をいそきても我年さむきをの丶山人

けにもと覚候事共にて候

埋火

68とにかくにさえ明こそ埋火のかけ迄うすき衣なりけれ

是又殊勝何とて毎首如此あそはし候やらん後京極殿の

御難もかやうの事をこそ申候やらん承し物をちと御ひかへ候へき〳〵

佛名

69ありなしのほかに心のみなもとを三世の佛の名をもわすれす

當宗御本意けにもにて候

歳暮

70法の道いそかれさりし月日経てかさなる年の暮そかなしき

是又しほれ候さま〳〵の御法のをきていつれも

渡てあそはし候ものかな

初恋

71思ひつて(ママ)あかしならはぬはつ鳥のねにたてすともしる人もかな

ことはりよく聞え候おもしろく候

忍恋

72しるへせよ心のおくに分そめてまよふしのふの山の下道
句のうつり所いつれもよく聞え候
聞恋
73憂人の袖やはぬれん世にもりてかゝるなみたの雨ときくとも
めつらしきやうにきかせられ候おもしろく候
見恋
74めくるなよ心の色のうつらふもけにはあたなる花のすかたを
首尾相應候
尋恋
75契あらは門させりともさはらめやおもふむくらの宿としらせよ
本哥本説いつれもよくより来候
祈恋
76いとふとてつれなき人も御祓せは恋を哀と神やうけまし
誠神慮にも通候へき御詠にて候殊面白候
契恋
77めくり逢ん夕を空に契りてもはかなや今朝の月の行すゑ
あら〳〵面白の下句候哉あらまほしき様にて候
待恋
78頼めつゝいそく春日の暮かたみさらは長閑にそふ夜はも哉
第四句此御詠にてはちとふとく聞えいかゝ心根は面白候
遇恋
79いつれをか先あらはさんねし床の枕のちりとつもることのは
いつれも〳〵おもしろくて候
別恋
80うかれ行玉とたにみよ露はらふ身は白妙の袖の別路
身は白妙の袖の別路めつらしくつゝき候哉誠金玉
顕恋
81なかれにきいまとこたへてせくかたもあらしあふせのとこの山川
なとり川と侍る一説もこの御詠の為に
かまへられけり面白哉〳〵
稀恋
82よしさらは忘れぬへしやあはすして過る月日のたつにまかせん
第三なを御案し候へかし
絶恋
83たかやとの風のやとりかかけそめて乱れはつらんさゝかにの糸
此さゝかにの糸一すしに面白さまに候
怨恋

84忘らるゝ身のうきかたの涙とはなされすとても世をは
恨みし
一躰に候
舊恋
85しるしなきおもひは年をふる川の枕のふたもととふかたも哉
又あひ見まくほしきさまをのつからしられいと
おもしろきさまに候
山家
86山はよもなをうき時や世中をいとふにそむく心なるら
む
うらかへしたるかゝり一興候おもしろく候
田家
87住すてゝのこる庵もかたふぬ(マヽ)苅田さひしき四方の
嵐に
殊勝ゝゝ
閑居
88岩か根の苔の雫に木隠て音に心をすます宿哉
一ふしに候
籬竹
89出つる日のまかきを越る影さしてみとりそなひくその、
呉竹
さる躰に候

羇旅
90帰らめやさかしき山に日ころへておとろへまさる鄙の
長路を
誠にひなのすまゐかくこそ候へ不便〳〵
海路
91山ちかくけさなりぬらし海原やとをき浪路の横雲の松
殊勝〻知家卿こよひすみつる山のはの月思ひ出され候
野宿
92袖しほる野辺のかりほの草筵夢はおもひもかけぬ露哉
首尾相應面白候
故郷
93古郷とならのあすかに飛鳥のこゑも昔の友やこひしき
古躰に成かへり飛鳥にて候悉金玉に候
眺望
94紙屋川まくらの波に夢覚て西なる山の月と見る哉
當社は参篭式さこそとおしはかり候
述懐
95をろかなることのはなから猶うけは神に手向て世には洩さし
是又今程の御詠に譜合殊勝ゝゝ
懐旧

96うかりしも情有しもふることを忍ふやひとつ涙なるらん
伏見院御製を見る心ち候殊勝にこそ候へ
無常
97朝夕にをくれ先たつ人の世をあはれと聞も哀いつ迄
あはれと聞も哀いつ迄よくかさなりて候面白候
蕭寺
98ちきりつゝ宮造せし都かなわかたつそまのおのゝ
ひゝきに
平安城叡山の昔内外諫者共以
一首願候目出殊勝候
瑞籬
99神もさそまことの道とみつかきのひさしき法の末まもるらん
此一首の内殊第二当社御心根にこもり候事候哉
よくより来候物哉是神慮に叶候つらん凡慮
たにも殊勝に候
祝言
100万代と跡たれそめし式嶋の国のさかへは神のまに〳〵
いかにも猶政道弥さかへられ不断参会申上候へと
尤同心候目出候
此百首のつゝみ紙に
百種に手向をきてもことのはをみかける露の玉やなからん
右百首今川上総介範政可一見之由被申
付而遣之處加言被返之候也
干時元禄第仁星集屠維大荒落暮
冬上旬爲附與女書寫之訖